

■部会名：環境・文化部会

■部会長（有識者委員）：押谷 一 委員

■市民委員：草野 靖広 委員、齊藤 良枝 委員、高儀 武志 委員、内藤 祐貴 委員、  
中野 和代 委員、野戸谷 睦 委員、山田 明美 委員

■意見の概要

**[環境・文化の視点から江別をこんなまちにしたい]**

- 情報図書館の開館時間が曜日によってバラバラで利用しにくい。市民が集まって活動できる場として公共施設の利便性を高めてほしい。
- まちむら農場のバイオガスの利用などがあるが、農村地帯を中心としてバイオマスプラントの補助を行政としてできないか。再生エネルギー利用促進を目指すまちとしてはどうか。消費地としての札幌が近く酪農家も多く、土地がたくさんあり、雪の有効利用などの大規模なものの導入や誘致が可能ではないか。
- 既存のスポーツ・文化施設などをうまく活用し、良い方向に持っていければ良い。
- 江別の特産品（山わさびなど）や飲食店、公園の整備、除雪について、平均レベルより上であるのに、市民がそれを実感できないところが問題ではないか。今年の幹線道路の排雪は、良かった。立派な産業（本州で販売している酪農公社の乳製品など）について、地元にもっとPRしてほしい。
- セラミックアートセンターをもっと使いやすくして、やきもの市と連携するとか、えぼあホールなどの施設の有効活用で盛り上げてはどうか。森林公園の散策ガイドの実施にも力を入れてほしい。
- 子どもの安全、防犯対策を進めてほしい。
- 10万人都市としての江別に市民として暮らしている意識・誇りを持つような仕組みを作るべきではないか。
- 文化と教育をつなぎ合わせて進めてほしい。日本教育新聞に、江別市で特徴的な取り組み（学級へのサポート）を行っていることが載っており、何か動けば全国に情報発信ができる。
- 安全面などの子育て環境の充実がもっと進めば、人口減に対応できるのではないか。
- 江別は自然環境的な条件が整っているので、積極的な活用が望まれる。
- 良い意味でも悪い意味でも札幌の横にあるまち。だからこそ、空間的なゆとりなどで、札幌にはない江別の良いところを上手く使えないだろうか。
- 子育て環境について、親たちの目の届かないところで朝から晩まで子どもが全身を使ってお腹いっぱい遊べる場所・遊具があるとアピールポイントになる。
- 大人が、江別に帰ってきたときにほっとできる場所・ゆとりの環境があったら良い。
- これまでも江別では過去からいろいろと考えてやってきたと思う。短期的な視点も大事だが、10年後、20年後をイメージして物事を考える視点も大事。
- これまで住みづらいということはなかったが、孫ができるなどで自分の環境・視点が変わると、子どもを中心に考えるようになり、遊具・道路の状況などの問題が見えてくるようになった。

## [環境・文化の視点から今あるものでもっと活用すべきこと]

- PMFのワークショップ（世界的に有名な演奏家等）の活用を例として、江別以外の地域の人たちも巻き込んだ、しかも特定の市民だけではなく広く一般的な市民に対してもインパクトのある行事を市民が自前でやると盛り上がるのではないか。また、子どもたちが本格的なクラシックに触れる機会を市として提供してはどうか（他都市でやっていないことをやってみる）。
- “総合デパート”だと札幌には太刀打ちできない。いろいろなことを江別ではやっているが、“専門店”にしないとミニ札幌や中途半端な形になってしまう。“専門店”としての方向性をはっきりと出すという覚悟が必要ではないか。例えば、音楽という方向性でいくなら「音楽のまち」、「子どもが音楽に親しめるまち」、「子どもが十分な音楽環境の中で音楽教育を受けられるまち」、あるいは、「安心して子どもを育てられるまち」などと銘打って、必ず10年後、20年後にはそうなりますという未来宣言をしたら良いのではないか。
- 市政の全方位的な話ではなく、市民レベルからの選択と集中により方向性を提案し、10年、20年、30年と長い期間を掛けて培っていくべき。
- 江別市にお金が落ちないのは、江別にある良いもののPRが足りず、中途半端で終わっているからではないか。
- 高齢者対策に重点を置くのか、子育てに重点を置いて話を進めるべきか、ということについて、片方だけに重点を置くこと、また切離して考えることは、どこの自治体でも無理なこと。集中と選択の中で、どういう内容で訴えかけるかが大切。
- 石狩管内のベッドタウンと言われるいくつかの都市の中で、いかに特色を出して子育て世帯を引き込むか、思い切った手を打つような定住策を考えるべきではないか。
- スポーツの振興で医療費等の削減に貢献できる。スポーツ施設の大きさが中途半端であり、成績も今ひとつなので、体育館の整備や専門的な育成をしっかりと行ない、青少年の頃からスポーツに積極的に取り組んでいくべきではないか。
- スポーツの振興で考えるなら、長期間にわたる参加の取り組みやアピールが必要ではないか。他の都市にはなくて江別にだけできるような取り組みが必要ではないか。
- “専門店”をつくるにしても、高齢者向けの“専門店”なのか、子育ての“専門店”なのか一定の方向性が必要ではないか。高齢者の方も、子育て世代の方も江別で暮らして楽しくて良い街を目指すという大きな方向性の中で、個別具体的な案件を考えて、それがどう繋がっていくかということを考えるべきではないか。

## [環境・文化部会としてのキャッチフレーズ~こういうまちにしたい]

- 緑と音楽のまち
- 安心して住めるまち
- 集えるマチ
- ぐらしゆったり
- やきものとれんがのまち
- 楽しく住めるまち

## [環境・文化という切り口からの産業振興]

- 産業という意味では、より広い地域からより多くの人を集めなければならない。イメージとして、ニセコのようにお金を落としに海外から人が来るなど、市外から多くの人がかかるという感じがする。
- わざわざ人を引っ張って来なくても、江別の中で雇用が生まれる産業があれば、生活保護が減ったり、税収のアップに繋がるのではないか。地元で物を買ってもらえれば良い。江別には農畜産、お菓子などの良い物産がある。道の駅をつくって江別の物産を売ったり、レストランで利用したりすることはどうか。
- 江別市でしか買えない商品があればよい。
- 酪農学園大学の製品で何か産業を興せないか。（⇒酪農学園大学の実習室で作っているので量が少なくあまり出回らない。）
- 歴史的に江別は、石狩川による流通・産業の拠点、野幌の夕鉄による産業の集積地であり、この2つの産業集積地に札幌のベッドタウンの大麻ができた。現在は、これら産業の土台、梯子が外された状態で顔がないまちになっている。もし、これまでの物流拠点の考え方でいくのであれば、高速道路を中心とした物流拠点として進めるか、鉄道網を整備するとか、札幌との接続を良くするとか、もしくは海の方へ道路をつなげるとか。もしそうでなければ、ソフト的な面や産学官の連携などで江別の特色をアピールする、例えば、農業資源を充分活用するなら、車で通過する人を捕まえて江別の特色をアピールするなど。環境・文化の視点でも従来型の考え方ではなく、新しい江別の街を見ながら考えていく必要があるのではないか。
- 具体的にどういう手を打てば、江別の環境を有効に活用できるのか。環境教育の話があるが、道立の公園との関係でいろいろな規制が存在すると思われる。市が単独で利用するにあたって、どういう方法があるのかについて、これまでの経過も踏まえて問題点等を検討したらよいのではないか。
- 夏場に雪を有効に利活用できないか。（例. 沼田町、モエレ沼公園等）
- これまで意見をずっと出してきたが、今回開催の部会の位置付けが不明。今後どういう方向で進めて行くのか説明が欲しかった。5次総計の裏打ちをするための全方位的な話し合いよりも、重点的なことについて話し合いが必要ではないか。
- 環境・文化部会として、まちづくりの取り組みに横串をさして重点化していくことを明確化していくべきである。